

市長記者会見記録

日時：2016年11月15日（火）午後2時00分～3時03分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：1. 川崎市と小田急電鉄株式会社との「小田急沿線まちづくり」に関する包括連携協定の締結について（まちづくり局）
2. 中原区役所が川崎フロンターレカラーの青に染まる（中原区）
～チャンピオンシップの優勝を願い、区役所職員が、川崎フロンターレのTシャツを着用して執務します～

<内容>

《川崎市と小田急電鉄株式会社との「小田急沿線まちづくり」に関する包括連携協定の締結について》

司会： それでは、ただいまより市長記者会見を始めます。

本日の議題は、1つ目として、「川崎市と小田急電鉄株式会社との『小田急沿線まちづくり』に関する包括連携協定の締結について」、次に、「中原区役所が川崎フロンターレカラーの青に染まる～チャンピオンシップの優勝を願い、区役所職員が、川崎フロンターレのTシャツを着用して執務します～」となっております。

それでは、まず1つ目の議題にまいります。初めに、小田急電鉄株式会社からお越しいただきました皆様方をご紹介します。

小田急電鉄株式会社代表取締役社長の山木様でございます。

山木代表取締役社長： 山木でございます。よろしくお願いいたします。

司会： 常務取締役の金子様でございます。

金子常務取締役： 金子でございます。

司会： 執行役員開発企画部長の黒田様でございます。

黒田執行役員開発企画部長： 黒田です。よろしくお願いいたします。

司会： 執行役員交通企画部長の立山様でございます。

立山執行役員交通企画部長： 立山でございます。よろしくお願いいたします。

司会： CSR・広報部長の菅原様でございます。

菅原CSR・広報部長： 菅原でございます。よろしくお願いいたします。

司会： それでは、福田市長より、今回の協定締結の概要等について、ご説明をさせていただきます。

市長、よろしくお願ひいたします。

市長： それでは、小田急電鉄株式会社様との包括連携協定の提携に当たりまして、まず私からご挨拶をさせていただきたいと存じます。

小田急電鉄様におかれましては、首都圏から観光地まで通ずる鉄道網を形成し、広域的な都市間の連携を支え、本市の発展に大きく貢献をさせていただいております。

特に、麻生区や多摩区が位置する北部エリアにおきましては、昭和49年の小田急多摩線の開通や新百合ヶ丘駅の開業とあわせた土地区画整理事業などの実施によりまして、計画的に市街地が形成された後、現在では、小田急グループが手がけるさまざまなサービスが日常生活に浸透し、地域住民にとって欠かせないものとなっております。

また、北部エリアは、大学や文化・芸術施設に加え、生田緑地、多摩川など豊かな自然や、小田急沿線には、小田急電鉄の所有地や、計画的な開発によって広がる住宅地など、多様な地域資源が存在しております。

また、平成29年度には、都内の複々線の完成が予定されており、北部エリアから都心方面へのアクセスの向上などにより、地域のポテンシャルがさらに高まるものと期待しております。

これらを踏まえ、今後の少子高齢社会の到来などを見据え、沿線のまちづくりを進めていく上では、鉄道事業者は大変重要なパートナーであり、今後、おおむね10年後を見据えて、お互いに連携し、具体的な取り組みにつなげていくことの方性を確認したことから、本日、包括連携協定を締結することにいたしました。

それでは、協定の概要を説明させていただきます。配付しております資料1をごらんいただきたいと思ひます。

左下、2にございます連携・協力の基本的な事項として、4つの柱を中心に取り組みを進めてまいります。

その主な取り組みにつきましては、資料2をごらんください。

初めに、左上(1)の「駅を中心としたまちづくりや公共交通機能の強化等に関すること」といたしまして、登戸・向ヶ丘遊園駅周辺の取り組みとして、登戸土地区画整理事業による都市基盤整備の推進とあわせ、高架下の有効活用や生田緑地などとの連携を図り、駅前の魅力とにぎわいの向上に向けた取り組みを推進してまいります。

次に、右上(2)の「くらしやすいまちづくりに関すること」といたしましては、市の地域見守りネットワーク事業との相互連携を図り、地域社会全体での見守りの充実に努めます。また、リノベーションなどの手法を活用しまして、沿線の既存ストッ

クの資産価値向上などを推進することで、空き家の利活用や住みかえ促進などの取り組みにつなげてまいります。

次に、左下（３）の「地域資源を活かした豊かなまちづくりに関すること」といたしましては、黒川駅周辺において、にぎわいや交流機能の導入に向けた段階的整備を検討するとともに、駅前の小田急電鉄の所有地には、読売日本交響楽団の活動拠点となる練習施設が誘致されるということでございますので、麻生区が取り組む芸術のまちづくりとも連携し、さまざまな取り組みを進めてまいります。

最後に、右下（４）の「鉄道沿線の魅力向上・活性化に関すること」といたしましては、「かわさきW i - F i」のアクセスポイントの整備などによる市民利便性の向上など、魅力向上に向けた取り組みを連携してまいります。

協定の概要についての説明は以上になりますが、本日の協定締結を契機といたしまして、この４つの柱を中心に、さまざまな分野で幅広く連携し、お互いに実りある関係を構築することで、市民の皆様にご喜ばれる、暮らしやすいまちづくりを進めてまいりたいと考えております。

最後に、この協定が、互いの持続的な成長や発展の一助となることを祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

司会： ありがとうございます。

続きまして、小田急電鉄株式会社の山木社長様より、協定締結の背景等について、ご説明をお願いしたいと存じます。

山木社長、よろしくお願いいたします。

山木取締役社長： ご紹介いただきました、小田急電鉄の山木でございます。

本日は、お忙しい中、大勢の皆様にご出席いただき、まことにありがとうございます。また、皆様には日ごろ格別のご高配を賜り、この場をおかりしまして、厚くお礼を申し上げます。

本日、川崎市長様と「小田急沿線まちづくり」に関する包括連携協定を締結させていただくことは、小田急グループにとりましても、まことに喜ばしい限りであります。

ここに至るまでの経緯、その概要につきましては、先ほどの福田市長様からのご説明のとおりであります。これまでの川崎市のご理解とご指導、ご協力に改めてお礼を申し上げたいと思います。

小田急グループは、お客様の「かけがえのない時間」、「ゆたかな暮らし」の実現に貢献することを経営理念として掲げております。この連携により、沿線の魅力や価値

を高めて、暮らしやすい沿線を実現してまいります。

さて、小田急線では、平成29年度に代々木上原駅から登戸駅までの複々線が完成し、平成30年3月のダイヤ改正により、混雑緩和や所要時間の短縮などの抜本的な輸送改善を図ることができます。特に川崎市域内の沿線は、複々線の効果が発揮できるエリアの1つであり、例えば、平日の朝、ラッシュ時間帯の新宿までの所要時間は、登戸駅や新百合ヶ丘駅から5分程度短縮されるなど、利便性が高まります。

協定に基づいた具体的な施策は資料2に記載しておりますが、連携・協力事項の(1)の鉄道を中心としたまちづくりに関するものでは、先ほどのお話にもありましたが、登戸駅構内4線化や同地区の区画整理事業が挙げられます。また、拠点性の高い新百合ヶ丘駅では、本年4月に公表された国の交通政策審議会の答申や市の総合計画など、将来の周辺環境の方向性を見据えて、駅周辺の整備や交通機能の強化の取り組みを連携して進めてまいりたいと考えております。

(2)の暮らしやすいまちづくりの面では、本年12月に新百合ヶ丘駅近くにサービス付き高齢者向け住宅レオダ新百合ヶ丘が開業します。また、当社が持つ住宅リノベーションのノウハウを活用し、既存ストックの活用強化と流通推進にも取り組んでまいります。当社が提供できる施策やサービスを川崎市様の施策と連携させ、高齢者から子育て世代まで、誰もが安心して住み続けられるまちを実現していきたいと思っております。

(3)の地域資源を活かした豊かなまちづくりでは、これまでも藤子・F・不二雄ミュージアムの魅力を連携して配信してまいりましたが、引き続き生田緑地との観光連携の強化に向けた取り組みを推進していきます。

(4)の沿線の魅力向上と活性化では、先ほど「かわさきWi-Fi」のお話も出ましたが、それに加えて、今月中には情報誌「川崎ぴあ」を制作し、行政サービスを含めた地域情報を紹介していくなど、連携を通じて、まちの魅力を発信する取り組みを推進していきます。

結びになりますが、この協定の締結を推進力に、川崎市様とともに、さらに暮らしやすい沿線の実現に向けた取り組みを進めていきたいと思っておりますので、引き続き皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

本日はありがとうございました。

司会： ありがとうございました。

協定書につきましては、既に記名・押印を済ませておりますので、ここで、写真撮影とさせていただきます。

それでは、皆様、どうぞ前のほうにお進みいただきまして、撮影のほう、よろしくお願いをいたします。

(写真撮影)

司会： よろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは、質疑応答に移らせていただきます。

なお、本件に関しましては、本会見終了後、会見室において記者レクを行わせていただきますので、あわせてよろしくお願ひいたします。

なお、「市政一般」についての質疑につきましては、2つ目の議題が終わった後、お受けをいたします。

それでは、進行につきましては、幹事社様、よろしくお願ひいたします。

幹事社： 幹事社です。よろしくお願ひいたします。一、二点ほど質問させていただきます。

まず、これ、川崎市長のほうから教えていただきたいんですけど、この手の、いわゆる企業グループとの包括連携協定が、これまで幾つかあるかもしれませんが、過去に幾つぐらいあって、今回が幾つ目になるかということと、そのうち、いわゆる電鉄系というんですか、そういったところとの、過去にあるのかどうか。

あと、小田急電鉄さんのほうに同じ質問なんですけど、御社として、こういう自治体と包括協定を結ぶのは何件目になるのか、そのあたりをお聞かせいただきたいと思ひます。

市長： 企業様との包括協定というのは数は相当ありますので、後ほど事務方のほうからお話しさせていただきたいと思ひますが、鉄道事業者様との連携は、市内に所在するという意味では、JR東日本様、それから東急電鉄様と、これまで包括協定を昨年結ばさせていただきました。そして今回が小田急電鉄様ということでございます。

山木取締役社長： 行政様との包括的な協定は、これが初めてでございます。沿線には多数の自治体さんがございますので、個別の案件について連携して、その覚書等は、それぞれの自治体さんと、過去にも数多く結んでおります。

今、大きな問題は、近郊区間の複々線化工事、連続立体交差ですね。これは東京都さん、国とで、これは一番大きな事業でございますけれども、そういった意味で、沿線の自治体さんとは、いろいろな意味で協力関係を結んでおります。

以上でございます。

幹事社： わかりました。

もう一点だけ。先ほど社長さんのほうからありました、代々木上原と登戸の間でし

たっけ。それが来年度ですか。29年度。

山木取締役社長： 29年度中ですね。

幹事社： 中に完成という形になるということで、そうしますと、今回の包括協定も、そのあたりを1つの大きなエポックというか、それを捉えてやっていこうというお考えになっていると。

山木取締役社長： 川崎市さんとは従前からいろいろな意味で協力関係は結んできております。特に多摩線をつくったときに、多摩沿線の開発の面で、マイコンシティですとか、それから新百合ヶ丘周辺の再開発、これは川崎市さんと協力してやってまいりましたけれども、今回は多摩線ができて、あれは昭和49年でございますね。やっぱり新しいまちも成熟化してきている。それから今回、複々線が、今お話ありましたように30年3月に下北沢地区ができます。現在は登戸から梅ヶ丘まで、もう全てでき上がっておりまして、効果も出ておりますけれども、最後の下北沢ができ上がりすと、代々木上原で新宿に行く電車と都心に入る大手町、千代田線に入る電車が、そこで分かれることとなります。そうしますと、途中、今、下北沢付近が非常に狭くなっております。その部分が全てダブルトラックになりますので、効果が倍増するというところで、先ほど申し上げましたように、大体、新百合・登戸で5分程度早くなります。

それから、もっと大きなのは、複々線の目的は、快適な通勤通学をご提供するのが鉄道会社の使命だということで、もう30年以上前になりますけれども、混雑率が沿線の人口に伴い、どんどんどんどん増えてきたと。そこをいかに快適なサービスを提供できるかということで、時間かかりましたけれど、ここでやっと3割ほど列車本数がラッシュ帯で増えます。そうすると、今191%の混雑率が、これは平均でございますけれども、160%台になる。計算でいくと、もう少し下がる可能性もございます。そういう意味で、これを契機に、もう一度、登戸以西の川崎市さんのエリアを深度化させて、暮らしやすいまちづくりを、川崎市さんと連携して、もう一度深めていきたいというのが、今回、市長さんと合意したところでございます。

幹事社： そのあたり含めて、改めて市長から、そういったことを踏まえて、期待を改めて。

市長： 今、山木社長のほうからおっしゃっていただいたとおり、都心アクセスというものが非常に飛躍的に向上するという点において、川崎市北部エリアがもう一度……。もう一度というか、今も魅力的でありますけれども、さらに魅力的な暮らしやすい環境が整えられると。この機会に、小田急様とですね。小田急さんは鉄道事業だけじゃなくて、生活関連のサービスというふうなのをたくさん行っておられますので、

そことも含めた連携を加えることによって、より暮らしやすいまちづくりに資するのではないかというふうに思って、大変うれしく思っているところです。

幹事社： ありがとうございます。

私からは以上です。

司会： それでは、各社様からございましたら、よろしく申し上げます。

記者： よろしく申し上げます。社長にお伺いします。

1つ、以前に複々線化の完成によって、2020年度と現在、2015年度と比較した場合に50億円程度の増収というような数字を小田急さんは発表されているかと思うんですけども、これの根拠というか、複々線化によって、この程度の沿線人口増えるとか、定期券の利用者が増える、そういった、何か数字があれば教えていただきたい。特に、その中でも、小田急沿線の中でも川崎市内、多摩区、麻生区になると思うんですが、その部分で、この程度、住民が増えるとか、定期券の利用者が増えるみたいな見通しがあれば教えていただけますか。

山木取締役社長： 一応、外部機関に調査をお願いしまして、複々線が完成した後の輸送需要をシミュレーションしております。その中で、大体4%から5%ぐらいの輸送人員の伸びが見られますので、それを換算して、約50億という形をとりますので、細かいデータは、すいません、今、手元にございませんであれですが、もし必要なら、また細かくご説明したいと思っておりますけれども、一応、そういうシミュレーションの結果、大体2020年度時点で2015年より約50億ぐらいの運輸収入の増収を期待する。これは鉄道収入だけですから、その周辺のいろいろな事業をこれから進めて、まちづくりですね。今回の川崎市さんとの連携もそうですけれど、鉄道だけではなくて、その周辺。鉄道が競争力が向上するわけですから、それを有効に使って、駅周辺の開発をもう少し推進させて、その周辺で、また収益も上げるという、その辺の相乗効果を狙っております。今、中期計画では2020年度まで、現在5,300億ぐらいの連結収益ありますけれども、一応6,000億を目指していこうという、これは中長期的な計画で、その核になるのが、今回の複々線の完成というふうに認識しております。

記者： 引き続き社長に伺いたいんですけども、登戸以西の複々線化について、今の時点で何か方針など決まっておりますら。

山木取締役社長： 現在、登戸から向ヶ丘遊園につきましては3線という変則的な形になっておりまして、向ヶ丘遊園までは、現在、進められております登戸地区の区画整理事業の中で鉄道用地を確保するという、そういう計画になっております。ですか

ら、この区画整理事業の進捗に伴って、複々線、あと1線、下りの1線ができる。

ただ、今、区画整理のほうは一生懸命お願いしておりますけれども、その完成といましようか、用地が手当てできませんと向ヶ丘遊園まではできないんですけど、まずは向ヶ丘遊園まで。

それから、向ヶ丘遊園から多摩線の分岐である新百合ヶ丘でございますね。これは今回の交通政策審議会の中でも答申が出ておりますけれども、やはり将来の需要予測も含めて、もう少し事業採算性の精査をしませんと、やはり今の段階で単独でそこを複々線化するという事は非常に難しい状況であります。これは今後の情勢を見ながらということになりますけれども、単独ではなかなか難しいかもしれませんし、だからそういう鉄道建設の、今いろいろな補助スキームがございますけれども、国、自治体さんと連携したそういうスキームを組み立てていけば、線増工事の可能性というはあると思いますけど、今の時点では、まだそこまで、残念ながら進んでおりません。今の段階では、まだやるやらないとか、そういうことは申し上げられないという形でありますが、今の段階では、単独ではなかなか難しい事業かなというふうには認識しております。

記者： 多摩線と都心とを直通する電車というのは、今でもかなり増えてきてはいると思いますが、今後も複々線化が完成すれば、さらに増やすということで……。

山木取締役社長： 現在、複々線完成後のダイヤについては、今、精査をしておりますが、社内では「ベストダイヤ」というような名称でやっておりますけど、まだ具体的に、どういう運行形態ですか、ダイヤの細かいところについては、申しわけございませんが、まだちょっと発表できません。ただ本数は増えます。それは約3割。ラッシュ帯で今27本ありますけれども、これは36本まで増えますから、その増えた分をどういうふうに都心部と新宿、割り振って、種別を考えて、今、着席でいきますと、特急を通勤帯に使っておりますので、この辺をラッシュピークではなくて、なるべくラッシュサイドで少しずつ増やすことができればいいかなというふうに考えております。まだ具体的なダイヤは今作成中ですので、そういう状況であります。

記者： ありがとうございます。

司会： ほかに、いかがでございますでしょうか。

記者： すいません。小田急さんにお伺いしたいんですけども、川崎市内の小田急沿線で1つの懸案となっているのが、向ヶ丘遊園の跡地の開発というか、跡地の扱いたいと思うんですけども、1回ちょっと残念なことになりまして、その後、その状態が膠着していると思うんですが、今回の協定で、すいません、社長にあんまり瑣末な

ことを聞くのも何なのですが、北部の市民にとってはとても関心事項なんで。今回の協定を踏まえて、あの跡地のあり方というか、活用というか、そういったものをもう一回練り直すであるだとか、あるいは別の方向にシフトして動かしていただくとか、そういったご意向というかお考えは、今のところありますでしょうか。

山木取締役社長： 平成16年に川崎市さんと向ヶ丘遊園跡地について基本的な合意書を作成しております、基本は生田緑地に隣接した向ヶ丘遊園の緑を保全しながら、生田緑地と連携した新しい施策を考えるということ。当初はご存じのように住宅系のことも考えましたけれども、その途中で川崎市さんと連携して、今、ドラえもんミュージアム、これは当社の向ヶ丘遊園の跡地の一部ですけれども、そこでミュージアムができていると。それから隣接して生田緑地もございまして、それから向ヶ丘遊園を閉園するときに、バラ園を川崎市さんをお願いして、今、移管をお願いしています。ですから、今の計画は、基本はやはりこの生田緑地に隣接した緑を守りながら、川崎市民の方を中心にした憩いの場といたしまししょうか、ドラえもんミュージアム、それから生田緑地とうまく連携といたしまししょうか、相乗効果が出るような、そういう施設といたしまししょうか、開発。基本的には、やっぱり緑をどうやって守っていくか。緑を守るために、川崎市さんからのご支援もいただかなきゃいけませんし、それは基本合意書の中にもうたっておりますので、基本は、今の緑をどうやって保全して、その緑を残しながら、どういう開発ができるかと。

もう大分いろいろな計画を練って、ああじゃない、こうじゃないとやってきましたけれども、まだ最終的なところまでは計画が煮詰まっておりますので、早い段階で次の計画を川崎市さんと一緒に発表できればというふうに思っております。

記者： 相当、小田急さんもいろいろとご苦労された上での今の状況だと思うんですけども、今回の協定で、より今まで以上に親密さが深まったということで、私も私事ですが、自宅が近くに近いもので、非常に関心事項ではあると思うんですが、そんなに遠くないスパンのところ、また青写真をお示しになっていただけるものでしょうかね。

山木取締役社長： 個人的には、私、若いときに、向ヶ丘遊園の支配人をやっております、思い入れは人一倍あります。それと事業とは、ちょっとまた別問題ですけれども、こういう協定を契機に、スピード感を持って計画を練り上げていきたいと。それには市長様の、いろいろご協力をまたいただかないとあれなんですけれども、そう遠くない時期に、スピード感を持って計画をお話しできるようにしたいというふうに思っております。

記者： ありがとうございます。

司会： ほかに、いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

それでは、本件につきましては、これで終了といたします。

ここで関係者の皆様が退室をされます。ありがとうございました。

なお、2つ目の議題にまいります前に、レクチャー台を用意しますので、少し準備の時間を頂戴いたします。よろしくお願いいたします。

《中原区役所が川崎フロンターレカラーの青に染まる～チャンピオンシップの優勝を願い、区役所職員が、川崎フロンターレのTシャツを着用して執務します～》

司会： お待たせいたしました。改めまして、2つ目の議題にまいります。

「中原区役所が川崎フロンターレカラーの青に染まる～チャンピオンシップの優勝を願い、区役所職員が、川崎フロンターレのTシャツを着用して執務します～」について、市長からご説明をいただきます。

市長、よろしくお願いいたします。

市長： それでは、川崎スポーツパートナーであります、川崎フロンターレのチャンピオンシップ優勝を願いまして、中原区職員がフロンターレのオリジナルTシャツを着用して業務を行うことについて話題提供をさせていただきたいと思っております。

川崎フロンターレは本年、創立20周年という節目の年を迎え、タイトルを勝ち取るために奮闘しており、Jリーグチャンピオンシップへの進出を決め、大きなチャンスを迎えているところでございます。

11月23日の準決勝、11月29日、12月3日の決勝を勝ち抜き、タイトル獲得に向けて、ホームゲームが開催される等々力陸上競技場がある中原区役所におきまして、11月18日以降の火曜日と金曜日に川崎フロンターレのオリジナルTシャツを職員が着用して業務を行うことにより、機運を盛り上げて応援していきたいと考えております。

私もフロンターレの試合については、日ごろからサポーターの皆さんとともに熱い声援を送っておりますが、11月23日の準決勝の応援にも駆けつける予定としておりまして、引き続き市を挙げて応援してまいりたいと思っております。

以上です。

司会： ありがとうございました。

それでは、ただいまご説明しました件について、質疑応答に移ります。進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

幹事社： 幹事社です。よろしくお願ひします。

すいません。細かいことで恐縮です。そのTシャツは大体幾つぐらい……。デザインとかですね。こういった方がつくって、何枚ぐらいつくって、細かいことですが、財源というか、どんなふうになっているのか、そのあたりをお聞かせいただきたいんですが。

市長： 今回、このTシャツは、川崎フロンターレ様からご提供いただいております。今回、オリジナルで作成していらっしやいまして、費用は確認しておりません。

今回着用する人数なんですが、区役所の職員、大体総勢450名いますけれども、区役所の庁舎を中心に300名ぐらいが着用する予定でございます。はい。

幹事社： デザインも、全て、じゃあ、クラブ……。

市長： ええ。クラブで。はい。

幹事社： 当然、チャンピオンシップ、去年からなので、こういったことというのは初めてになるわけでしょうか。

市長： はい。今回が初めてです。スポーツパートナーさんという取り組みをするのは初めてということですので、川崎フロンターレも初めてですし、市役所でこういう取り組みをするのは初めてということです。

幹事社： わかりました。

23日に鹿島とやって、勝てば決勝で、等々力が29日で最終戦まで行くということなんですが、改めて市長から期待の言葉をいただけないでしょうか。

市長： この前、天皇杯もしっかりと粘り勝ったということで、ほんとうに、天皇杯もそうですけれども、チャンピオンシップ優勝に向けて、市民全員が一丸となって応援して、選手が最大限の力を出せるように、私はじめ市民の皆さん、サポーターの皆さんと全力で応援していきたいというふうに思っております。

幹事社： ありがとうございます。

各社、どうぞ。

記者： ちょっと意地悪な質問かもしれないですけど、競合チームのファンの職員がいた場合、一応、公務ということで、やっぱり着てもらおうようなことになるのかどうかということ。

市長： 一応、それはお願いはするということでありましてけれども、強制ではないので、一応、みんなで応援しましょうという。かつ、非常に区役所、深刻な課題をお持ちで来庁される方もいますので、そういった部署はこういったTシャツは控えさせていただくということに、そういう配慮はさせていただきたいと思っております。

記者： ありがとうございます。

幹事社： 関連で、すいません。今、慎重な部署って、例えば、どういった部署は着ないという……。

市長： 個人的、それぞれのご家庭で非常にいろんな課題をお持ちで、深刻なケースというふうなのでご相談に来られる福祉関係だとか、そういった感じで来られる方も多いというところが区役所でございますので、そういったところは少し控えると。

幹事社： その他の、だから主な窓口業務というか、相談などを中心に着用するという。

市長： そうですね。はい。

幹事社： わかりました。

記者： よろしいですか。ごめんなさい。23日に負けた場合はどうなんですか。

市長： 必ず勝つと信じておりますが、百万が一ぐらい、そうなった場合には着用としないということになると思います。それ以降はですね。

記者： 23日に勝って、29日に準決勝に進んだ場合、例えばですが、そのTシャツを着て、パブリックビューイングじゃないですけど、区役所でテレビ観戦するとか、そういうことは計画されているんですか。

市長： パブリックビューイングは別途企画をしています。いわゆる区役所で職務時間中に見るということはありませんけれども、市民対象には、そういった計画は、今、準備をしているところです。

記者： ありがとうございます。

記者： よろしいでしょうか。よろしくお願いいたします。

川崎市さんは川崎フロンターレさんと密着な関係性があると思うんですけども、ここまで20周年の中で観客動員数も増えてきていると思います。この観客が増えてきた、サポーターが増えてきた要因は何だと思ってるのかというのが1点と、市とチームの関わり合いでは何が一番大切なのかなというのを、市長はどう思われているか、ちょっと伺わせていただければと思います。

市長： やはり、最初、クラブ創設時は、なかなか観客も入らないしということから始まったんですが、それ以降、選手やクラブがほんとうに地域のために、川崎をサッカーで盛り上げようという、この取り組みですね。自治会・町内会だとか、商店街だとかという地域のイベントにも、ほんとうに中に入り込んで、この20年間やってきた。駅でピラを配るとか、そういった取り組みというふうなのをクラブ全体でやってきたという、その取り組みが市民の皆さんに非常に受け入れられて、まさにクラブと

選手とサポーター、市民が一体となった、こういった情勢に、この20年間で築き上げてきたものだというふうに思います。ですから、非常にJリーグのアンケートをとりましたも、地域に貢献しているチームというアンケートをとっても、6年間連続ナンバー1と、Jリーグの中でナンバー1というのは、それは今申し上げた、みんなで作って上げてきた20年間の歴史だというふうに思っています。

記者： ありがとうございます。

記者： お世話になっています。

市長： はい。お願いします。

記者： このTシャツを中原区役所で着られる以外に、パブリックビューイング、先ほどご計画だとおっしゃいましたけれども、何かほかに、チャンピオンシップに向けて、フロンターレカラーを出すような計画はおありでしょうか。

市長： ええ。いろいろ予定しているんですが、これは言っているのかな。ちょっと、どうぞ。

中原区地域振興課長： まず、中原区役所を含めて各区役所庁舎では、応援のための懸垂幕、さらに今出ておりますけれども、ポスターなども展示をしながら応援をしようというふうに考えているところでございます。

さらに本庁舎におきましては、ビッグユニフォームということで、応援するためのものを、18日からの予定で、今考えているところでございます。

市長： よろしいでしょうか。

記者： ありがとうございます。

司会： ほかはいかがでございましょうか。

記者： すいません。細かい点で恐縮なんですけれども、市長、火曜日と金曜日っていうのは、これ何かあるんですか。

市長： 金曜日は、それから火曜日も試合前日という、そういう意味です。

記者： 試合前日。毎日着てというわけにいかないんですね。

市長： いや、私は毎日着て職務したいんですけど、ただ、やはり衛生面だとかというふうなこともありますし、そういった意味で前日に盛り上げていこうという。

記者： わかりました。

中原区長： 火曜日は当日ですね。

市長： 火曜日、当日。火曜日、当日。

記者： 火曜日、当日。

中原区長： ええ。金曜日は土曜日の前日ということになります。

中原区地域振興課長： 前日。

中原区長： すいません。火曜日も前日だそうです。すいませんでした。前日でもよろしいですね。

記者： 23日だと当日ね。23日だと当日。

中原区長： はい。

司会： ほかはいかがでございましょうか。

記者： 今回、このチャンピオンシップで初めてのタイトルを奪えた際には、市として何か、優勝した暁にはやられる。選手へのご褒美とかチームへのご褒美みたいなのを、何か計画されていることはありますでしょうか。

市長： まず、大々的に優勝パレードはしたいなというふうに思っています。市民が待ち望んできた、20年間待ちに待ったタイトルということですので、大いに市民とともに盛り上げたいと思っています。

司会： ほかはいかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

記者： 写真を。

司会： では、最後、写真を、もし撮られるようでしたら。

(写真撮影)

司会： よろしいでしょうか。

それでは、本件につきましては、これで終了といたします。

市政一般の質疑に移ります前に、市長、お召しかえさせていただきます。お時間を頂戴いたします。

(市政一般)

《川崎フロンターレについて》

司会： お待たせをいたしました。それでは、改めまして、市政一般についての質疑応答に入らせていただきます。進行につきましては、幹事社様、よろしく願いいたします。

幹事社： 直近のやつの関連でもいいですか。

市長： はい。どうぞ。

幹事社： 先ほど大々的にパレードをやるというのは、もう既に、ある程度、その準備をされて、例えば、どのあたりをやるみたいなことを考えてらっしゃいますか。

市長： 1つは、やはり市全体ということになりますと、市役所前というふうなのは。

幹事社： ですよ。

市長： だと思えますね。詳しいことは、まだあれなんですけども。

幹事社： それは市と、例えば、商工会議所とか、そういった関連団体とも協力しつつみたいイメージですか。

市長： ちょっとまだ、その詳しくは、今ちょうど検討をしているというか、調整をしているところです。

司会： いかがでございましょうか。

《アメリカ大統領選挙の結果について》

記者： じゃあ、大きく2点。

1点目が、アメリカの大統領選挙が終わりまして、トランプ大統領が誕生することになりました。トランプ次期大統領は、選挙戦中、特定の人種であるとか民俗について排斥をするような発言も多々あったかと思えます。そうした人物が、日本の友好国であるアメリカに誕生するということについて、率直にご感想をお伺いしたいのと、あと姉妹都市として、ボルチモアとのつき合いがあるかと思うんですが、その姉妹都市との関係に、このトランプ大統領の就任というのは、何らか影響を及ぼす可能性があるというふうにお考えでしょうかというのが、まず1点です。まず、こちらからお伺いします。

市長： 選挙結果から見てとれるのは、やはり……。というか、いつも言っていることですけど、世界的な潮流として、排他的というか排斥的な言動だとかというふうなのが蔓延しているというふうなのは、ほんとうにゆゆしき事態だというふうに思っています。そんな中で、経済的にというか、格差がやはりかなりアメリカでも進んでいるということが、今回の選挙結果に大きく影響しているのではないかなというふうに思っています。そうした意味で、大分、選挙結果が出てからの発言というのは、やや修正がされているようなことも見受けられるので、今後、大統領になられたら、これまでの発言は修正されるのではないかなということを期待しながら、注視していきたいというふうに思っています。

記者： もう一点、ボルチモアとの。

市長： ボルチモアの関係は、特に何の、これまでも長い友好関係がありますので、何ら変更はないというふうに思います。

《政務活動費での視察に関する報告書について》

記者： それが1点目で、もう一点が、先般、弊社のほうで報道させていただいたん

ですが、川崎市議会の自民党会派の中で、政務活動費を使った研修で、全く、ほぼ一言一句同じような視察報告書を出していたという問題がありました。一義的には、これは議会に説明責任があると思うんですが、これは公費で行く視察でありますので、税金を市民から徴収する立場である市のトップの立場として、議会でそうしたことが、ある種、慣例化というか、実際行われていたということに関して、どのような感想をお持ちでしょうか。

市長： 僕はちょっと報道、御社の記事しか拝見していないので、何とも言いづらい部分あるんですけども、あれを見る限り、ちょっと僕の認識が違ったら申しわけないんですが、あれって、これが何か問題あるのかなと思ったんですね。要は、みんなで視察に行って、そして、むしろばらばら視察報告書って書くものなのかと、みんなで行ったんだから、その視察報告って1つでいいんじゃないのっていう、むしろ、そっちのほうが、何かおかしいなというふうに。だから、ちょっと僕は、何と申しますかね。どこが問題なのかというところが、よくわからなかった部分があるんです。ですから、それは僕も詳しく調べてないからあれですけども、記事を見させていただいた限りでは、ここが何か問題あるのかなというのは率直な感想です。

記者： 識者からは、公費で行く限りは、それぞれの議員が責任持って書くべきであると。同じ場所に、かなり大多数の人間が行っていると。同じ報告しか出てこないのであれば、そんなの大勢で行く必要があるのかというような指摘もありました。その辺については。

市長： 僕はだから、それは目的とあれによって、要するに、1人じゃなくて、みんなで見ることが大事だということもあるんだと思うんですよね。ですから、それは目的に応じて、それぞれ視察される人が主体的にしっかりと市民に説明のつくやり方で、そして報告の仕方というのも、しっかりやるべきだというふうに思います。ただ少数だからとか大人数だからとかということではなくて、その目的に応じたものがあるんじゃないかなというふうに思っています。

記者： わかりました。

《議会との関係について》

記者： 市長、すいません。議会との関連の話で、もう一つ。

これも一部で、昔からある問題なんですけれども、また最近、地方議会が注目されているということで、改めて話題になっていることなんです。執行部側、川崎市では理事者側といいますけれども、執行部側と議会側で答弁と質疑の事前のすり合わせ、

答弁調整と平たくここでは言われていますが、をすることの是非ということが言われています。私は、まず、個人的には、一定の事前通告と、それからあとすり合わせのようなものがないと実りある議論ができないだろうということは、そのとおりだと思います。一方、川崎市のように、ほぼ完璧な状態で答弁調整をしていた場合に、大変僭越な申し上げ方なんですけど、議場でそれを読み合うだけの形になってしまって、双方に緊張感が欠けてしまうという嫌いがなしでもないなというぐあいに思います。全く通告もするな、答弁調整もするなということではないんですけど、これを再質問、再々質問に関しては答弁調整をしないでとか、あるいは通告だけを受けるだとか、そういったような形にして、もう少し議会に緊張感を持たせていくことが必要なんじゃないかと思うんですけども、それは執行部側にとっても緊張感を持つということなんですけど。最近でいうならば、小池都知事が9月議会で答弁調整なしでやったというふうには報じられています。ほんとうかわからないですけども。古くからいえば、片山さん、鳥取県の元知事がやっぱり議会での答弁調整をやっていないということがあります。いろんなご意見あると思うし、一概にだめだとは言えないと思うんですけど、市長の意見を聞かせてください。

市長： これ、地方議会もそうですけど、国会のほうでも、これ、河井さんおっしゃるとおり、なかなか古くて新しい話題で、要するに、政治家として答えていくときは、大きな方向性の話をしましょうというふうなことで、細かな数字だとか、ことというふうなのは、むしろ聞いても答えられないしというふうな、ある程度の合意の中で、そういうふうにするということは、僕はそれはあると思います。

ただ、議会として何を市民に本会議場というところで、あるいは委員会という公の場で、そこを引き出す、公式なコメントとして引き出すのかということ、何を求めるかによってだと思えます。ですから、ざっくりとした議論でいいんだということであれば、ある程度、準備なしでやりとりできるというふうなのは、それぞれの委員会に出ている担当の人間も、それなりに詳しい人間が担当のところは出てますので、答えられると思います。ただ、細かいことというふうなのは、どうしても事前の調べが必要なので、それは求められれば、そういうふう事前に調べるという形にするので、本来、どういう形がいいのかということは、ほんとうに議論の余地があるというか、それは要は市民の代表者ですから、議会はですね。市民の代表者として、議会でどんな答弁を求めていく、られるのかというふうなのは、議会の中でも、ぜひ、ご議論はあるんじゃないかなというふうに思います。

記者： 市長はもともと県議をなさっていて、そのときは綿密に調整をした上で質疑、

それから答弁に臨んでいたのでしょうか。

市長： 実は僕が県議のときは、一般質問で本会議場でやるときは、質問は提出してはいましたが、どんな答えが返ってくるかというのは、実はよくわからなかったって、そういうのがなかったので、聞いてがっかりということは結構いっぱいありましたね。で、何だ、これと。議場で聞いて、こんな答えしか返ってこないのかというふうに憤ったこともたくさんありましたね。それはやはり、圧倒的、執行部側の優位な体制で物事が進んでいたんだと、僕はあのとき感じてて、今、川崎市議会見ると、随分と議会に寄ってるというか、最大限のやれる、ある意味、全てをやってるんじゃないかと。議会に対してですね。議会イコール市民の代表に対してやっているのではないかと、僕は印象を持っています。

記者： 市長おっしゃるように、非常に綿密に、答弁調整という言葉フラットに使用しますが、答弁調整をされていることによって、実質的に、そこで議論が行われたりだとか調整が行われたりして、実りのあるものになっていることは事実だと思います。ただ一方で、肝心の本会議場でのやりとりが、これも大変失礼な言い方ですが、学芸会というかですね、と揶揄されるような状態になってしまっていることも否めない部分があると思います。どこに球が飛んでくるかわからないというか、いつ指名されるかわからないというか、そういう中で、やっぱり鍛えられる。理事者側が鍛えられる部分というのもあると思いますし、実際に、私、そういうふうに切りかえた議会を見たことがありましたけれども、非常に、ここで言うところの理事者の側も勉強されるようになったし、議員さんたちもトータルでやるので、恥ずかしい質問できないということで、非常に勉強するようになって、そこは再質問から以降だったんですけども、非常に効果があったと思います。やっぱりここは開かれた議会を目指していて、市長はそれが開かれた市政を目指している以上は、やっぱり本会議場での、ある意味、ガチンコの議論を市民に見てもらおうということも、パフォーマンスであってはいけないと思いますけれども、また1つ必要なことだと思うんですが、このままの、先ほど市長は議会でもご議論があると思うという話だったんですが、市長、今、市長として、今の状態で、このままでいいだろうというお考えなのか、それとも、もう少し検討してみてもいいというお考えなのか、そのいずれでしょうか。

市長： 僕は議会という場に出てお答えする側の人間としては、ある意味、どちらでも、それはいいと思います。どちらでもいい。どちらでもいいんだけど、先ほど来申し上げているように、ざっくりと質問だったら、ざっくりとお答えするしかできないと。細かいことを聞かれても、その場では無理ですよというふうなのに、市民の

方は納得するかという、その納得感の問題だと思いますね。ですから、それは市民の皆様が望む形というふうなのは、いかようにもあると思いますけれども、それにはいろんな制限だとか限界というふうなのはあるというのは、これはみんな、誰しもうかがえることだと思います。だから、僕はどっちでも、市民の皆様に、よりわかりやすく伝わるような形というふうなのが望ましい形だと思いますので、それはぜひ、すごく主体性を欠いた言い方になっちゃうかもしれませんが、議会として、どう考えるのかというふうなのは、議論はあるんじゃないかなというふうには思います。

記者： ありがとうございます。

《LGBTについて》

記者： よろしいでしょうか。

LGBT、性的少数者に関する施策についてお尋ねします。

千葉市が来年1月から、政令市かな、全国の自治体で初めてということで、職員に結婚・介護休暇を導入するという、あとは世田谷、渋谷でパートナーシップの要綱・条例が本格的にスタートして、ちょうど1年たったというあたりを踏まえて、川崎市として、今後、何か性的少数者に対する施策を打ち出していくようなことをお考えでしょうか。

市長： 人権イニシアチブの中でも、性的マイノリティー、LGBTのことについても、しっかりと今後、検討、取り組んでいくというふうな記述をさせていただいておりますけれども、実際に具体的な事業としては、LGBTの当事者の方を呼んで市民の公開講座を行ったり、あるいは教員だとか私たち職員に対する講習会、研修会というふうなものも行わせていただいて、まずは自分たちの身内の職員から、そういう理解をちゃんと深めると、正しい理解を行うということが、まず第1に大事だというふうに思います。そのことをちゃんと理解しないと、正しい理解のもとに施策を進めないと、僕はねじ曲がった方向に行く気がして、そこにまず力を入れていきたいというふうに思っています。

実際、民間ベースで、いろんな取り組み、企画をされている、川崎市内でもありますので、そんな人たちとも、これから、今後連携していきたいなというふうには思っています。

記者： ありがとうございます。

《市長就任からこれまでの取組等について①》

記者： 一応、19日で任期が1年ということで、弊紙も他者さんもインタビューをやるけれども、一応、会見の場でもお聞きしておきたいんですけども。改めてどうでしょうか。残り任期1年を18日で切るということで、どういう感じで臨みたいのかということと、あとは2期目に向けてのお考えというのを……。

市長： まず、3年間、とても早かったですし、全力で職員の皆さんと一緒に頑張ってきたという、そういう思いはあります。市民に約束をしたマニフェストについても、今、期間的には4分の3来ましたけれども、おおむねいい方向には来ているのではないかなというふうに思いますが、一方で、マニフェストで記述していない事柄という、新しい挑戦も日々やっていかなくちゃいけないし、課題もやはりどんどん新しく出てきていますので、そんなことについても、これからも挑戦していきたいというふうに思っています。

今後については、まだ残り4分の1はしっかり残っていますので、これからも緊張感を持ってやっていくということでございます。

記者： 2期目に向けての判断というのは、いつごろなされるということは、どうでしょうか。

市長： どうなんですかね。まだ、何とも。はい。

記者： わかりました。

《市長就任からこれまでの取組等について②》

司会： いかがでございましょうか。

記者： すいません。今のお話に関連してなんですけれども、市長が最重要課題として位置づけてきた待機児童ですが、子育て施策に関してですが、この点において、これまでの3年間の所感といたしますか、ご自身の施策の評価というものを伺いできればと思います。

市長： 子育て関連施策ですか。

記者： 子育て関連。

市長： そうですね。おっしゃっていただいたとおり、私の最重要課題かつ一番早期に取り組まなくちゃいけない施策が子ども関連施策ということで取り組んできました。それはもう、一定の方向で来ているとは思いますが、ただ、ほんとうにうれしい悲鳴なんですけれども、特に子育て世帯が川崎に非常に増えているということですので、子どもの数自体が増えていますから、待機児童対策についても、こんだけ、100カ

所以上も保育所、認可保育所だけでも整備してきたのにもかかわらず、さらにそれでも足りないということですから、これはもう手を緩めることなく、これからも挑戦をし続けていかなくちやいけないというふうに思っています。ですから、去年、待機児童、厚労省での規定でのゼロというものを達成したときに、これがゴールではなくて、これがスタートだというふうなことを申し上げました。で、毎回毎回、やっぱり4月1日時点のとかというふうに出ますけども、ほんとうに常に今も待機児童いるわけですから、この前も100名というふうな数出ましたが、そういう意味では、毎日がスタートだし、挑戦だしということを繰り返しやっていかないと、その期待には応えられないんじゃないかなというふうに思って、緊張感持ってやっていきたいと思っています。

記者： ありがとうございます。

司会： いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして会見終了といたします。

なお、1つ目の議題の小田急電鉄との協定につきましては、この後、10分後を目途に、会見室のほうで事務レクを行いたいと思いますので、あわせてよろしく願いいたします。ありがとうございました。

市長： ありがとうございました。

(以上)

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355